

# 日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ  
2001年 秋号 No. 25

発行 日本行動分析学会 理事長 小野浩一  
〒154-8525 東京都世田谷区駒沢1-23-1 駒澤大学文学部心理学研究室  
電子メール: [j-aba@komazawa-u.ac.jp](mailto:j-aba@komazawa-u.ac.jp)  
電話: 03-3418-9303(心理学研究室事務局)  
FAX: 03-3418-9126(日本行動分析学会事務局と明記して下さい)  
ホームページアドレス: <http://behavior.nime.ac.jp/~behavior/>

## 第20回大会のお知らせ

第20回大会準備委員長 河嶋 孝(日本大学)

第20回大会は、2002年8月22日(木)から24日(土)まで、日本大学生物資源科学部(略称 日大湘南キャンパス)で開催いたします。最寄り駅は小田急線六会日大前駅で、駅から徒歩約5分でキャンパスに到着します。主要駅からの所要時間は、新宿、東京、新横浜からはいずれも1時間前後、横浜から約40分、藤沢から約15分です。江ノ島、江ノ島水族館、石原慎太郎・裕次郎やサザンオールスターズの桑田佳祐の地元として名高い湘南海岸、古刹・大仏で有名な鎌倉などの観光地が近い場所にあります。ちなみに、藤沢から東京ディズニーランドまでは約1時間30分です。

大会準備委員は、主催校のスタッフが少ないことと、今回は学会設立20周年の記念大会ですから、常任理事の方々にもお願いしました。

これまでの大会は会期2日間でしたが、今回は記念大会なので、3日間としました。20周年特別企画として、第2日に、記念講演とシンポジウム「アジアにおける行動分析学の現状と展望」を行います。

記念講演は、山口薫先生に「応用行動分析:わが国における発展と課題」、佐藤方哉先生に「日本行動分析学会20年のまとめと今後の展望(仮題)」をお願いしました。

シンポジウム「アジア・・・」は、韓国などアジアの諸国から行動分析家を招待し、日本側報告者とともに、各国における行動分析学の現状と今後の展望を報告して頂きます。話し合いを通じて、わが国における将来の行動分析学のあり方を探る方向づけができることを期待しています。報告は英語で行われますが、日本語の報告要旨を用意し、パワーポイントなどの視覚的資料を使って頂く予定です。

大会日程は次のようになります。

- 第1日 口頭発表、研究委員会企画シンポジウム、公開ワークショップ
- 第2日 ポスターセッション、特別企画、特別講演「シェイクスピアと能と行動分析学」、懇親会
- 第3日 口頭発表、特別講演「行動分析学から見たPTSD(仮題)」、会員自主企画シンポジウム

口頭発表は、これまでの時間配分では発表時間や討論時間が短いというご意見がありましたので、二つの会場で並行して行い、発表時間20分、討論10分といたします。今までは一つの会場で発表して、基礎の研究も応用の研究も全員が聞けるという良き伝統があったのですが、時間の制約から、二つの会場に分けることになりました。発表の内容によってテーマを分け、同じテーマの中に基礎と応用を含めることを予定しています。最近の大会では基礎の口頭発表が少ない傾向がありますから、基礎の方のご発表をぜひお願いいたします。

公開ワークショップは「基礎」「応用」「動物トレーニング」の三つを並行して行う予定です。会員・非会員の研修を目的としますので、大会参加費とは別に参加費を頂くことにしました。内容の詳細は1号通信でお知らせします。

特別講演「シェイクスピアと能と行動分析学」を上田邦義先生(日本大学大学院教授)にお願いしました。上田先生は、シェイクスピア劇を能に翻案したり、イギリスなどで英語訳の能を上演なさっていて、海外でも著名な方です。行動分析学と関連する「個と環境」について、実演とビデオを交えて講演なさいます。

特別講演「行動分析学から見たPTSD(仮題)」はRick Spates先生(ウェスタンミシガン大学教授)がお話し下さいます。スペイツ先生は、地下鉄サリン事件や神戸震災の時に話題になったPTSDについて、この10年ほど研究を続けておられます。一般臨床における行動分析学の適用は数少ないので、興味あるお話が伺えると思います。通訳付きです。

会員自主企画シンポジウムの企画について、ふるって応募して下さいますようお願いいたします。また、大会終了後の企画も考えておりますので、ご期待下さい。

本大会では、経費節約のため、プログラムだけを単独で郵送することはいたしません。プログラムは論文集に印刷しますが、早めに知りたい方は大会ホームページをご覧下さい。ダウンロードして印刷することもできます。

1号通信は2月上旬に郵送し、大会参加・懇親会参加・会員自主企画シンポジウムの申し込み期限は3月31日とする予定です。

来年の夏、湘南の地でみなさまとお会いしましょう。

○大会ホームページ: <http://homepage2.nifty.com/j-aba20/> 事務局メールアドレス: [j-aba20@gssc.nihon-u.ac.jp](mailto:j-aba20@gssc.nihon-u.ac.jp)

---

## 著作権集中のお知らせ

「行動分析学研究」及び「行動分析学会大会発表論文集」掲載記事の日本行動分析学会への著作権の集中について  
担当理事 藤 健一

「行動分析学研究」掲載記事の著作権については、第12巻1・2号合併号(1998)から、また「大会発表論文集」については、第17回大会(1999)から、日本行動分析学会に著作権を集中致しました。これにより、著作権集中後の当該記事については、情報学研究所(旧学術情報センター)の電子図書館サービスに登録され利用が可能となりました。

今回、日本行動分析学会にその著作権を集中する以前の「行動分析学研究」及び「大会発表論文集」の掲載記事について、次のとおり取り扱うことが、去る2001年8月24日の2001年度日本行動分析学会総会において承認されましたので、ここに改めてお知らせいたします。

1. 「行動分析学研究」第1巻(1986)から第11巻(1997)までの記事
2. 「行動分析学会大会発表論文集」第1回(1983)から第16回(1998)までの記事

この(1)と(2)の当該記事の著作権を、日本行動分析学会に集中致します。このお知らせ(公知)は、ニューズレター、「行動分析学研究」彙報などにおいて行います。

公知期間は、2001年度総会から2002年度総会の前日までとし、2002年度総会において、著作権集中について確認を致します。

2002年度総会において、著作権集中の確認がなされたのならば、当該巻号の当該記事、抄録を情報学研究所電子図書館へ送付します。

もし、このスケジュールが進めば、「行動分析学研究」と「大会発表論文集」の全記事の電子図書館での閲覧は、2003年の夏以降に可能になると思われます。

---

## 公開講座報告: 地域密着型公開講座を行って

## 土屋 立(筑波大学心身障害学系)

10月14日に「地域密着型・会員発信型の公開講座」を目的とした公募制度による第1回目の公開講座を行いました。講師に、山本淳一氏(学会員・慶応義塾大学文学部)と行動分析学に基づいた地域療育を実践している久保田英美氏(非学会員・このご療育教室主宰)をお迎え、「自閉症児(発達障害児)のコミュニケーションと学習ー幼児期・学齢期の子どもの親支援・家庭支援ー」というテーマでお話いただきました。参加者合計は105名で、内訳は親39名、通常・特殊学級教諭22名、養護学校教諭9名、保育士6名、地域療育指導員8名、福祉・教育行政関係者7名、学会員+学生14名でした。

講演は以下の構成ですすめられました。( )内は講師名、敬称略。1. コミュニケーション・学習と問題行動(土屋) 1)「できるようになって欲しい行動」と「やらないで欲しい行動」の関係 2)「できるようになって欲しい行動」リスト / 2. 人とやりとりする力、話す力、聞く力を家庭で育てる(土屋) 1)何を教えるのか? 2)いつ、どこで教えるのか? 3)どうやって教えるのか? / 3. 「やらないで欲しい行動(問題行動)」への対応(山本) 1)問題行動の「機能(働き)」を知るための観察の仕方 2)問題行動の「機能(働き)」の特定と対応方法 / 4. 一人で判断する力を家庭で育てる(山本) 1)自分で自分に指示を出して行動を起こせること 2)自分が何をしているのかということをきちんと把握すること 3)自分で自分を誉めること 4)達成感を得る 5. 新しいことを学ぶ力を家庭で育てる(山本) 1)長くて難しい行動は、短い行動に分ける 6. 家庭でできる指導ー事例紹介ー(久保田) 7. Q & A(山本)

講座終了後に参加者の皆さんにアンケート(全て自由記述)をとりました。「公開講座で最も印象に残った点は?」という質問には、「まず、できること(適応行動)をひとつでも増やすようにすること(16名)」「大人の関わり方が子どもの行動に影響を及ぼす(7名)」「物理的環境を調整することの重要性(6名)」「行動分析学に興味をもった(6名)」などの回答が寄せられました。「家庭や学校で取り入れられそうな点は?」に対しては、「紹介された具体的な指導例(12名)」、「行動分析学に基づく関わり方(10名)」「誉め言葉を増やす(8名)」、「目標の設定を不適応行動の減少から適応行動の増加へと変える(6名)」などがあげられていました。「今後扱って欲しいテーマ」としては、「青年期・思春期への対応(7名)」、「自立生活・就労について(4名)」など、「年長の方への支援について情報提供して欲しい」という意見が見立ちました。

今回の講座は、親の会との共同開催のため、全く行動分析学を知らない親や学校関係者が多数参加されました。潜在的に行動分析へのニーズをもつ地域の方々に直接情報提供を行うことができたと感じています。また、講師の先生方には「わかりやすい情報提供」を行うために、具体的な例をビデオや図を使いながらお話していただきました。その結果、開催後のアンケートでは、話のポイントがきちんと伝わっていることが現れており、「わかりやすかった」という感想が大多数でした。「公開講座」が「地域への情報提供」として機能するためには、まず、潜在的なニーズをもつ人をいかに集めるかが問題になります。今回は、親の会と連携し、「親が教師を呼ぶ」という形で実現することができました。今後、さらに広範囲にわたる方々への情報提供が、学会員の手によってなされていくよう、本制度の継続と活発な利用を期待しています。

## シリーズ 現場に行く: 第5回 投資行動と行動分析

### 始めに

私はこれまで、実務的な立場から資産運用や資産運用に関する分析に携わってきました。私自身は、行動分析の理論に通じているわけではありませんが、株式投資行動について、私の考える行動分析的な観点から述べさせて頂きたいと思います。行動分析というよりも、社会学や心理学に近いかもしれません。

### 株価は会社の値段

株価は企業の値段です。株価を決定する要素は主として、利益、資産、成長性があげられますが、必ずしも機械的に一つの価値観により値段が決まるわけではありません。投資家として山田さんと4つの会社の例で考えてみます。山田さんは4つの会社のいずれかを買収しようと考えています。

- A社 ラーメン屋で店が1つで利益が今年1億円
- B社 ラーメン屋で店が2つで利益が今年2億円
- C社 ラーメン屋で店が3つだが今赤字
- D社 インターネット企業で利益が今年1億円

A社の値段がいくらかと考えるとき、いちばん簡単な基準は利回りです。A社を10億円で買えば、毎年1億円の利益が得られるため、10%の利回りとなります。現在のとてつもない低い金利からするとかなりの高収益です。仮に20億円で買うと5%の利回りとなります。山田さんが5%の利回りで納得しA社を20億円で買ったとします。B社の値段は、A社の2倍の店舗数で2倍の利益を得ていることから、A社の2倍の40億円が妥当だと思われます。単純な正比例の関係です。

C社は店舗が3つありながらも赤字です。店舗数からするとA社の3倍になっていいはずですが。店舗数が多いことからC社の潜在能力はA社よりも勝ると考えることも出来ます。利益を重視すると、C社は利益が出ていないため、A社よりも安くなるはずですが。こういう場合に、企業の値段をどうつけるかは投資家によりまちまちです。利益を重視する人もいれば、資産(店舗)を重視する人もいます。また、C社の将来の利益をどうみるかでも値段は大きく変わってきます。

D社は今年の利益額ではA社と同じです。しかしながらインターネットは成長性が高いため、10年後には利益額が10倍になるかもしれません。そうするとA社の10倍の値段でもおかしくありません。ラーメン屋同士であれば、比較も簡単ですが、ラーメン屋とインターネット企業を比較するのは困難です。インターネット企業にどのような値段をつけるかは未だに議論の分かれるテーマです。それぞれの投資家は、固有の投資行動をとる場合が多いようです。短期的な利益を重視する人、長期的な利益を重視する人、資産を重視する人等様々です。しかしながら、何故、個々の投資家が固有の投資行動を取るのかについての分析はこれまで殆どなされていません。経済学よりも行動分析に近いテーマだと思われます。

### 自己で保有するための投資と転売目的の投資

山田さんの例は山田さんが投資することによって得られる利益で満足するかどうかで決まりました。個人でつける値段だと言えます。しかしながら、現在の株式市場では、投資家は自分自身が保有するためではなく、転売して利益を得るために株式を売買します。この点に関しては、ケインズによる、「株式投資は美人投票」という言葉が有名です。この言葉の意味は、株式投資においては、自分自身が美人だと考える銘柄を選択するのではなく、多くの投資家が美人だと考える銘柄を選択すべきだということです。選挙では、自分が良いと思う候補者を選ぶのが普通だと思います。また、レストランでも、自分が食べたいと思うものを注文するのが普通です。しかしながら、株式投資では、「皆が買いたいと思いたい株を選ぶ」のです。

このため、個人の行動分析よりも、集団の中での個人の行動分析がより有効だと思われます。

### 株価のメカニズム

学術的な分析では、「会社が自社の利益予想を変更したら株価はどうか」といった分析が多いと思います。株価は、様々な要因の影響を受けますが、最終的には企業の利益との関係で説明される場合が多いためです。このため、「○に対する反応としての△」的な枠組みでは、「利益に対する反応として株価」で説明するのが一般的です。次の式が最も簡単な式です。株価=EPS(1株あたりの利益)×PER(株価収益率)この式の意味することは、株価は利益と人気で決まるということです。利益は山田さんの例でも出てきた会計的な意味での企業の利益です。証券会社に企業分析アナリストやエコノミストが沢山いるのは、主として利益を予想するためです。PERは人気指数と呼んでもおかしくないぐらい不安定な数値で株価の変動は利益の変動と同じぐらいPERの変動で動きます。正確にはPERは株価を一株当たりの利益で割っただけの数値で事後的に計算される数値です。PERが高ければ利益との比較で株価が高く、PERが低ければ利益との比較で株価が安いと言えます。利益が増大することで株価が上昇するように、利益が変わらなくても投資家が買うためにPERが上昇することで株価が上昇することもよく起こります。文章中で、割安、割高という表現が出てきたらこの株価収益率を念頭においていると考えて下さい。

### 群集心理

株式投資では先の式で示されたとおり、利益額を予想すること、予想された利益に対して株価が適正であるかを判断することが重要です。このうち、利益額の予想は、経済や産業の分析だけの世界です。これに対して、予想された利益に対して株価が適正であるかどうかは、経済学的な知識だけでは判りません。市場参加者が、その値段で受け入れるか受け入れないかで決まるからです。

98年頃、IBMの株価が米国の他のコンピュータメーカーに較べて、IBMの利益に対して割安でしたが、成長性、安定性のいずれも業界内では優れている方でした。一般に優良な株は割高な値段がつきますが例外でした。何故、安いのか、証券会社の企業アナリストに質問したところ、「私にも何故安いか判らない。買いチャンスだと思い、買い推奨している」という答が出ました。おそらく、多くの市場参加者は、「皆が買わないのは何かわけがある。だから自分も買わないでおこう」と考えたのだと思います。今はトヨタの株はそれなりに評価されていますが、昔は実力以下に評価されて

いた頃もありました。投資家は、皆が納得しているものについては、自分も納得してしまうようです。

2000年初をピークに、インターネット関連株が大きく上昇しました。多くの投資家が、「インターネット株は利益では説明できない値段で取引されている。馬鹿げている」等と言いましたが、「インターネット株が上昇し、皆がインターネット株を買う中で自分だけ買わないと自分の成績が悪くなる」と多くの投資家が買ったため、「インターネット株を買う→買うから上がる→上がるから買う」という循環が出来上がりました。最後は、急落しましたが、経済学というよりも、行動分析的な話です。

### 過大な動き

株式市場は往々にして過大な動きをします。ある会社の利益が5%落ちたら株価は5%落ちるのが正比例の関係です。しかしながら、ある会社の利益が5%落ちるの株価が30%下げることがよく起こります。長い眼で見ると、利益が5%しか下げているのに株価が30%下げれるのであれば、株価は下げすぎであり買いチャンスであると言えます。しかしながら、「皆が売らさうから自分も売らう」という考えから株価は往々にして過大な動きをします。

非常に悪いニュースが出ると、「売りが売りを呼ぶ」という現象も起きます。下がる前に売ってしまうと、投資家が競って売ってしまうため、株価が急落するような現象です。

### ゲームのルール

人間が言葉を覚える場合には、幼児期からステップを経て学ぶことが出来ますし、学んだことは生涯、有効です。多くの分野での学習は言葉を覚える場合と同様に一度学習すれば長い間役に立ちます。しかしながら、株式市場では、学んだことが役に立たなくなることが頻りにあります。株式市場では、いつも同じ方法でいけば勝てるというわけではなく、その時その時で、勝てる手法は変わってきます。この、流行のような現象があるため、市場参加者は常に変化する環境へ対応しなくてはなりません。バブル時代は人々は競って不動産投資しましたが、その頃は、資産を多く持っている会社の株が好まれました。90年代末期から2000年初めにかけては、人々は競って国際優良株へ投資しました。2000年以降は、それほど優良ではない割安株が人気でした。2001年の秋頃は優良株人気復活しつつあります。近年は、日本の投資家の投資行動だけでなく、海外の投資家の投資行動も日本の株式市場に大きな影響を及ぼしています。日本の投資家は、海外の投資家が大きな影響を及ぼすようになった日本の株式市場での投資行動を学習し、実践しつつあります。

### 割安株効果

群集心理的な効果だけでなく、個人の心理学的な効果もあります。昔から、心理学的な効果として、「割安株効果」というものが指摘されており、次のようことを意味します。

- 一般に優良だと思われる株は実力以上に割高に評価される
- 一般によくはないと思われる株は実力以下に割安に評価される

株式を評価するやり方として配当利回りというものがあります。配当利回りとは受取配当額を投資金額で割ったものです。優良だと思われる企業の場合には、配当利回りが低い場合が多いのですが、市場において、配当額に対して高い値段で株価がついているため、配当利回りが低くなるのです。逆に、人々からあまり好まれない銘柄は配当をきちんとしている場合には、配当利回りが高くなります。お金を得るために行う投資としては、優良株よりも、優良株でない株の方がメリットがある場合が多いというのが割安株効果です。実際の投資の話はもう少し複雑です。成長企業であれば、企業の成長とともに配当額は毎年増えていきますし、企業が倒産すれば配当額が無くなります。優良企業は業績が安定しているため、多少は割高に価格がついても自然です。また、投資家は、配当以外にも株価の値上がりからも利益を得ることが出来ます。

しかしながら、こうした諸要因を加味しても、「優良株の株価はその安定性や成長性を加味しても割高になりがちだ」という一般的な、傾向は世界各国で指摘されています。「よい会社とよい投資は違う」という言葉があります。よい会社の株を買うことがよい投資を必ずしも意味しませんが、多くの投資家は「よい会社はよい投資」と考えて行動する人が多いようです。

### 行動金融学(Behavioral Finance)

いわゆる金融工学と呼ばれる学問領域があります。統計学を駆使して、市場における価格形成等を分析する学問です。金融工学の中に、行動金融学(Behavioral Finance、一般に、日本国内でも Behavioral Financeと呼ばれており、行動金融学とはこの場だけの翻訳語)と呼ばれる領域があります。日本に入って来たのはここ2~3年のことだと思われます。

ご参考までに論文集を一冊ご紹介いたします。Advances In Behavioral Finance (Richard H.Thaler編集、Russell Sage Foundation)というBehavioral Financeの分野の論文集です。主なタイトルは次のようなものです。Noise Trader Risk in Financial Markets/Does the Stock Market Rationally Reflect Fundamentals Values?/ Measuring Abnormal Performance: Do Stocks Overreact? /Forward Discount Bias: Is IT an Exchange Risk Premium?

市場参加者の行動が合理的か、企業の価値の変化に対して過剰反応していないか、逆に反応が過小ではないかといったことについての実証分析が主な内容です。日本でも少しずつ分析され始めているようですが、日本で取り上げられるテーマも同じようなテーマが多いようです。

領域は少し異なりますが、数学の一つの領域であるゲームの理論は、一部の研究者は投資行動の分析に役立てようとしています、なかなか応用が難しいようです。

投資家の行動が、心理的な側面、特に群集心理的な側面により影響されることは誰もが知っています。その分析の重要性も誰もが理解していると思います。しかしながら、心理的な側面を分析する手法は未だに確立されておらず、これからの発展が楽しみな領域だと思えます。

この分野に御関心がある方、研究のテーマとして取り上げてみたいという方は、[duke@japan.email.ne.jp](mailto:duke@japan.email.ne.jp)迄ご連絡下さい。出来る限りのご案内を致します。

## リレー特集: 私の好きなこの論文ーその6ー

山本淳一(慶應義塾大学文学部)

友永雅己さんからバトンを渡されました。刺激等価性についての議論は、フォーマルなところでぜひやりたいですね。次年度の年次大会(日本大学)での研究委員会企画シンポジウムは「刺激性制御をめぐる」です。

私が好きな論文は、Jones,R.R., Vaught, R.S., & Weinrott,M.(1977) Time-series analysis in operant behavior, Journal of Applied Behavior Analysis, 10, 151-166.です。行動分析学の方法論についてのものです。これは、立命館大学の望月昭先生(すいません、望月さんと呼ばせて下さい)が、慶應義塾大学の助手でいらっしゃった頃、読むよう紹介していただいたものです(もっと確立操作が強かったかな)。私は修士の1年生でした。その頃、佐藤方哉先生の研究室では、行動分析学の単一事例研究計画法の方法論としての意義を理論的に議論していた時期でした。いろいろなテキストでは、反転法(reversal design: ABAB design)がはじめにあらわれるのですが、こういう研究計画法にのる行動はないよとか、多層ベースライン法(multiple baseline design)では、ひとつの行動についての介入が別の行動に影響を与える場合はどうするんだろう、などと考えていました。(望月さんからは、そのずっと後で、多層ベースライン法じゃなくて、反転法が行動分析学の理念を最も代表する方法だと言われて、また目が覚めました。)望月さんは、学問的にとっても厳しくて、「明日までに読んで説明できるようにしてこい。もしできなかつたら・・・。」と、この論文をぱんと渡してくれたのでした。学問的に強力に鍛えていただいた恩義は忘れません。

実験心理学の研究室にいましたので、統計学や実験実習の授業や卒論では、グループデザインをつくって、分散分析などでデータを出すのが当たり前というかんじでした。いかにも心理学らしいですね。ただ、自分がやりたかったのは、子どもの社会行動やコミュニケーション行動の獲得過程の研究で、変化におよぼす条件を長期的に知りたかったのです。ひとりのひとりの子どもの変化をていねいに追いかけていくことが、いちばんリアリティーのあることでしたし、行動は変わるんだということをデータ上で示したかった。この論文は、介入の効果のありかたについて、例えば時系列分析ではデータ間の依存性がある場合には自己相関係数をとらないとだめだよとか、わりと統計的な分析のきちとしたことが書いてあるのですが、その時の私にとって面白かったのは、ベースラインと介入時の「レベル(ベースラインの最終値と介入の始発値の差)」と「トレンド(傾き)」で、介入の効果を見ていこうという概念図でした(p.157, Fig.1)。「介入つき時系列分析」におけるC統計検定とランダムイゼーション検定についての厳密で、ホットな議論は、行動分析学研究の河合伊六先生たちの論文(1987)や山田剛史さんの論文(1999)をご参照下さい。)レベルがゼロでもトレンドで差がある場合。レベルが大きてもトレンドで差が無い場合。レベルが大きてもトレンドも差がある場合などの概念図がのっています。ともかくデータを取ってみて、ベースラインのトレンドの安定を見て介入をする。介入がうまくいかなかったら、それをまたベースラインとして次の介入を考える。「ともかくやってみる」というまず行動ありきの方法論に強くひかれました。統計にひっかかる小さい変化ではなくて、目で見て分かって、誰が見ても納得するドラスティックな変化を示すデータをあげることが、応用研究者として一番大事であることを学びました。発達障害児の研究を続けてい

こう思ったときも、こういう方法論の支えがなかったら(分散分析しか思い浮かばなかったら)、精神年齢を等しくした健常児と障害児の比較くらいの研究しかできなかつたかもしれません。

こういう方法論を使えば、子どもが行動的介入によって大きく変わっていくんだということをデータとして示せる喜びを感じました。これは、いまでも、ずっと続いている喜びです。1987年に教示要求表現の研究を教育心理学研究に出せたのも、こういう方法論の支えと確信があったからです。(最近のYamamoto & Shimizu(2001)も読んでいただけたら幸いです。)

日本語で読める標準的なテキストは、Barlow とHersenの本ですが、この中の章で、Alan Kazdin(エール大学)が書いたところ(第9章)がまた面白いのです。通常の、t検定やF検定、時系列分析、ランダムイゼーション検定、ノンパラメトリック検定法の紹介の後に、中央値分割法(split-middle technique)というのが紹介されています。ベースラインを半分に分けそれぞれの中央値を線で結びます。それをベースラインのトレンドとします。それを延長させていったラインを介入のフェイズまで伸ばします。それをベースラインをそのまま続けたらこうなるというライン(外挿ライン)とします。介入フェイズのプロットについて、このラインより上に来ている数と下にきている数を比較します。総数が決まっています、上に来る(仮想的ベースライン値より高い値:介入効果を示すもの)数と下に来る数は、直接確率で比較できます。二項検定ができるわけです。(実はもう少し小技があるのですが、それはテキストをご覧ください。)これを読んだとき、方法論は自分でつくれるんだ、という思いを深くしました。「方法論」がまずあってそれに合わせられる「事実」を探すのではなく、知りたい「事実」がまずあってそれを最もよく表せる「方法論」を選ぶ、それが見あたらなかつたら、つくっちゃう。行動分析学のダイナミックなところだと思います。

このテキストの面白い点はもうひとつあります。それは、リプリケーションのところ(Beyond Individual: 第10章)。よく単一事例研究計画法について、行動分析学以外の研究者から、それだけの少人数のデータで結論を出しちゃっていいの?と言われることがあります。それについての回答。一人で集めたデータは、確かにせいぜい3人から5人のデータです。ただ、その効果が大きいものならば、あるいは、それが社会的にみてとても重要な意味を持つデータなら、そのデータを見てみんなが追試するはず。また、自分でやることもあります。全く同じ研究をやる場合もあるし(direct replication)、対象者をかえる場合もあるだろうし(clinical replication)、条件を少しかえる場合(systematic replication)もあるでしょう。そういうデータが集まってくると、その研究テーマで、数10人のデータが集約されてきます。それらを系統的に分類すると、どのような指導方法が効果的かの評価ができます。これは、共通のパラダイムをもつ学派だからできることだと思います。ひとりでできることは、どんなに偉い先生でも限られていますから。行動分析学的メタアナリシスといってもいいですね。

もし、データの再現性がなかつたら、あるいは効果が小さいものだったら、そのような介入についての研究は衰退していきますよね。研究の流れそのものも、環境条件によって変容していくわけです。研究そのものが、かっこつきの「理論」の整合性によって生き残っていくのではなく、「事実」の安定性によって生き残っていく。行動分析学が社会に開かれているということは、方法論の上からもいえることなのです。常にデータを出していくということが、社会に開いていくということの意味だと思います。そのための方法論をもっているのですから。

リレーのバトンは、大阪教育大学の大河内浩人さんに渡したいと思います。C統計学の研究やヒトを対象とした厳密な実験的行動分析の研究をなさっておられますのでぜひそこらへんのお話をうかがいたいと思います。1999年の北海道医療大学でのシンポジウムの「内発的動機づけ」のご発表はたいへん面白かったです。Deciの研究のていねいなレビューをされてましたよね。ぜひ論文が読みたいです。

## 文献

- バーロー,D.H. & ハーセン,M. (1988) 一事例の実験デザイン: ケーススタディの基本と応用 (高木俊一郎・佐久間徹監訳) 二瓶社
- Kazdin, A.E. (1998) Research design in clinical psychology. (3rd Ed.) Allyn & Bacon.
- Yamamoto, J. & Shimizu, H. (2001) Acquisition and expansion of Kanji vocabulary through computer-based teaching in student with mental retardation: Analysis by equivalence relation. Japanese Journal of Special Education, 35 (6), 17-31.
- 山本淳一 (1987) 自閉児における教示要求表現の形成. 教育心理学研究, 35, 97-106.
- 河合伊六・河本肇・大河内浩人 (1987) 単一事例計画法における処遇効果のC統計による検定. 行動分析学研究, 36-47.
- 山田剛史 (1999) 単一事例実験データへの統計的検定の適用: ランダムイゼーション検定とC統計. 行動分析学研究, 87-98.

## 書評: こんな本を書いた！ 訳した！ 読んだ！

『行動分析学からの発達アプローチ』シドニー・W・ビジュー & エミリオ・リベス編(山口薫・清水直治監訳)二瓶社 2001年 7月 20日 3400円(税別)

清水直治(東京学芸大学)

本書の編者の一人であるビジュー先生は、3年前に来日した折に(卒寿)を迎えられたから、今年の11月で(93歳)になるはずである。周知のように、ビジュー先生は、障害のある子どもの指導に行動分析学の原理を応用した最初の研究者であり、行動分析学のまさに黎明期から今日に至るまで、指導的立場をとりながらその発展と共にあり続けたといえよう。ビジュー先生の著作は、その何冊かはすでに日本語に翻訳されており、日本にもたびたび来日され、我国の行動分析学の発展にも大きな寄与をされた。そのビジュー先生らの編になる本書にひょんなことから出会うが、内容が濃密であって難解さが散見するので、しばらく放置したままになっていたものを、ついに翻訳という運びになった。

行動分析学では、発達とは個人の反応と環境からの刺激の随伴性という相互作用における一連の体系的で前進的な行動の変化を記述する用語であって、発達を生活年齢という大まかな単位とともに変わる行動の変化であるとして疑わない、肥満して感覚鈍磨になった発達についての伝統的なアプローチとは劇的に相違する。本書は、実証データをもとに、自明のこととして年齢との相関で発達を構想する主流派への真摯な挑戦の書であり、行動分析学から「行動の発達」を検討しようとして、4カ国から9名の行動分析家がメキシコに終結した最初の国際会議の成果を掲載したものである。

第1章(はじめに)で本書の構成が示され、第2章で、成達は年齢という“空虚”な変数に基礎をおく成熟、臨界期などによる説明によってではなく、全体の環境と生体に変化する文脈のなかで学習が行動成達の基盤を提供することが述べられ、第3章では、行動分析学による行動成達の考え方とその応用に関する考察が行なわれ、その応用の実際として、第4章で乳児のオペラント学習と馴化、第5章で言語獲得、第6章で概念の成達が扱われている。第7章では人間成達の科学研究に焦点をあて、因果分析を行なう科学を志向することの重要性が指摘された。第8章でビジュー先生は、行動の成達において状況要因の概念を考慮すべきことを強調する。第9章では、成達は単に変化するだけではなく、行動が複雑性を増し高次に組織化される過程であることに着目して、伝統的な成達理論のいくつかを参照しながら、成達心理学の本質は何か問われている。そして最後の第10章では、行動成達を行動のパターン化という用語を用いて、成達心理学の伝統的な枠組みに拘泥することなく、科学的理解は人間行動を理解する一つの方法に過ぎないことを承知しつつも、環境を制御するうえで科学的に厳格に理解することの価値を主張する。

行動分析学はもとより心理学の一分野ではないし、むしろ世界を記述する方法の一つであって実証科学である。その意味で、多くの仮説的構成概念からなる心理学からは最も遠い位置にあるのかもしれない。それゆえに、行動分析学の基底にある理念や哲学に立ち返れる本書を、ぜひ読んで下さることを願いたい。

(原書) Sidney W. Bijou & Emilio Ribes(Eds.) New Directions in Behavior Development. Context Press. 1996

日本行動分析学会編集「ことばと行動: 言語の基礎から臨床まで」(ブレイン出版)

責任編集者 浅野俊夫・山本淳一

日本行動分析学会編の「ことばと行動: 言語の基礎から臨床まで」(ブレイン出版)が、本年9月10日に刊行されました。おかげさまで、初版第1刷はすぐに完売いたしました。現在、2刷りに入っているところです。すでにお求めになっている方も多いかと思いますが、再度お知らせ申し上げます。購入ご希望の日本行動分析学会会員の方は、直接ブレイン出版に、会員であることを告げ、必要部数も含めてご連絡、ご注文下さい。

会員からのお申し込みには、割引特価にて販売いたします。連絡先は、〒101-0064 東京都千代田区猿樂町1-3-1 ブレイン出版株式会社(担当: 山崎・渡辺) TEL03-3293-1471/FAX03-3292-8534 [yamazaki@brain-shuppan.co.jp](mailto:yamazaki@brain-shuppan.co.jp)

本の中から、「目次」および「はじめに」の部分を選抜掲載いたします。

はじめに(浅野俊夫・山本淳一)

## 第1部 行動分析学からみた言語

- 第1章 言語への行動分析的アプローチ(佐藤方哉)
- 第2章 言語の生物学的背景:チンパンジーにおける言語行動の合成実験(浅野俊夫)

## 第2部 言語の機能的分析

- 第3章 言語の獲得と拡張:条件性弁別と刺激等価性(山本淳一)
- 第4章 ひらがなの獲得:音節の分解・抽出(清水裕文・山本淳一)
- 第5章 コミュニケーション機能の獲得◆:要求言語行動(マンド)(藤 金倫徳)
- 第6章 コミュニケーション機能の獲得◆:報告言語行動(タクト)(井 上雅彦)
- 第7章 言語の行動調整機能:「ふるまい」に影響を及ぼす「ことば」の獲得(武藤崇)
- 第8章 言語機能の高次化:ルール支配行動とオートクリティック(小野 浩一)
- 第9章 認知発達と言語行動:「心の理論」研究から(奥田健次)
- 第3部 言語の指導・支援・援護(療育、教育、医療、福祉の中へ)
- 第10章 障害と言語行動:徹底的行動主義と福祉(望月昭・野崎和子)
- 第11章 発達障害幼児の言語指導:単語の理解、命名の獲得にむけて(谷晋二)
- 第12章 学校教育の中での言語指導:ことばをのばす教育環境づくり(佐竹真次)
- 第13章 問題行動と言語:機能的コミュニケーション訓練(平澤紀子)
- 第14章 言語療法における支援技法:記憶障害者に対する日常生活行動へのアプローチ(吉畑博代)

以下、「はじめに」より抜粋。

この本は、日本行動分析学会の企画として出版された。日本行動分析学会は、1983年に設立され、行動分析学にもとづく研究、教育、実践活動を促進し、その成果を公開していくことを目的としている。

行動分析学は、心理学の中でも、理論的研究、基礎的研究、応用的研究にわたる系統的で包括的な体系化を目指していることが大きな特徴である。言語は、意識を含むヒトの高次の心的機能を支えている。その点から、行動分析学も言語の分析と臨床的支援を大きなテーマとして、研究、実践を行っている。

行動分析学からの言語へのアプローチの特徴は、「個人と環境との相互作用」を分析および臨床適用の単位としている点にある。話し手の行動だけでなく、聞き手の行動も含めて分析の単位としている。言語を成り立たせているのは、「話し手の頭の中」や「心の奥底」にあるのではなく、「個人と環境との相互作用」すなわち「行動随伴性」の中にある。この観点を徹底させたことが、言語臨床についての包括的支援を可能にできたゆえんである。

行動分析学の創設者スキナー(B.F. Skinner)が、1957年に、「Verbal Behavior(言語行動)」を出版して以来、多くの理論的、基礎的、応用的研究を生み出してきた。その多くは、以下の学術誌に掲載されている。基礎研究を中心とした「Journal of the Experimental Analysis of Behavior(実験的行動分析誌)」、応用研究のための「Journal of Applied Behavior Analysis(応用行動分析誌)」、理論研究を中心とした「Behaviorism(行動主義)」「Behavior Analyst(行動分析家)」、言語行動の研究に関する「Analysis of Verbal Behavior(言語行動分析)」などである。わが国においても、1986年度から刊行されている日本行動分析学会の機関誌である「行動分析学研究」においても、多くの言語に関する論文が掲載されている。また、本書の各章の引用文献に示されているように、心理学や言語臨床に関する学術誌にも多くの論文が発表されている。

行動分析学では、行動や心を理解するとは、予測と制御が可能になることである。科学的理解は、行動のゆくえを予測し、それを制御している条件を見いだすことで実現されると考える。これは、基礎研究において行われるのみならず、応用研究を実施する上で大きな指針になっている。理論研究は理論のためにあるのではなく、個人と環境との相互作用のあり方を明確にそして厳密に定義し、包括的な枠組みを示すためになされ、応用可能性まで射程に入れている。

本書の特徴は、理論、基礎、言語臨床への応用までを、行動分析学という共通の枠組みの中で論じ、実践例を検討しているところにある。また、最新の最も重要でホットなトピックスを論じている。各章では、最新の応用研究、臨床研究の成果を盛り込んである。理論研究、基礎研究の積み重ねが、いかに臨床上の成果をあげる上で貢献しているか読みとっていただければ幸いである。

本書のもうひとつの大きな特徴は、関連する学問領域の研究成果を十分検討し、それらを分析の対象にしていることである。各章の内容と引用文献や索引をご覧になれば十分に理解いただけると思う。言語学や心理言語学からは、意味論、語用論、なども対象となっている。また、発達障害

学やコミュニケーション障害学だけでなく、最近の教育心理学的研究や認知発達研究の流れをまとめ、行動分析学の観点からの展望とデータも示している。

また本書では、臨床支援の技法を具体的に論じているのも特徴である。発達臨床における言語の早期療育、学校教育の中での言語指導、施設環境の中での利用者の自己決定を実現するための言語支援、問題行動解決のための言語支援技法、脳障害をもつ人への言語療法における支援技法などを具体的な実践例をふまえてまとめている。

第1部は、行動分析学からの言語のとらえ方についての理論編である。

第1章では、行動分析学の理論的な背景、基本的な考え方、分析のための枠組み、用語の定義を紹介し、その中での言語や言語行動をどうとらえるかを中心にまとめている。言語をめぐる問題を徹底的行動主義の立場で検討し、言語と意識との関係を明快に示している。

第2章では、ヒトのユニークな特徴である言語がどのような生物学的な背景を持つかを、チンパンジーに言語を教える試み(合成実験)を通して検討している。言語に含まれる反応型(反応トポグラフィ)、要求や報告などの機能、その成立のための条件などについて詳しく書かれている。

第2部では、(1)言語の意味や単位が獲得され、拡張していく過程を検討し(第3章、第4章)、(2)言語のコミュニケーション機能(第5章、第6章)、および行動調整機能(第7章)を明らかにしている。また、高次化した言語が行動にどのような働きをもたらすのか(ルール支配行動)、言語自体が伝達の効果をあげる上でどのように変化するか(オートクリティック)(第8章)、いわゆる認知発達の中で言語がどのような役割を果たすか(第9章)をまとめている。

第3章では、言語が獲得される上での最も基本的な単位である「環境と個人との相互作用」、すなわち行動随伴性を明らかにし、その獲得過程について論述している。獲得される語彙が拡張し、それが階層的な構造をもち、高次化していく過程についても言及している。意味が獲得され、語彙が拡張していく刺激等価性のプロセスを整理している。

第4章では、音と文字との関係が獲得される過程を分析している。これまで行われてきたひらがなの指導を、行動分析学の観点から整理しなおし、ひらがな獲得のための必要条件を明らかにする試みである。ひらがな指導のための効率的、効果的な指導方法としてマトリックス訓練を提案し、適用した事例の検討を行っている。

第5章は、最も基本的なコミュニケーション機能である要求言語行動(マンド)の定義、機能、その指導技法についてまとめている。言語行動をその制御変数の観点からいかに定義するかを明快に論述している。要求言語行動を生み出す上で環境条件の設定の仕方と指導事例の検討がなされている。

第6章は、コミュニケーション機能のうち、報告・叙述言語行動(タクト)の定義、機能、関連する言語行動(命名、比喩表現、応答、教示)の機能の分析を行っている。従来、自閉症児には困難であるとされていた報告・叙述言語行動が、行動随伴性を明確にすることで獲得可能であることを、多くの指導事例から明らかにしている。

第7章は、言語のもうひとつの重要な機能である行動調整機能を行動分析学ではどのように扱うかに関して、ルリヤやヴィゴツキー学派の理論と研究との関連の中で検討している。行動調整機能は、自己制御や自己調整に向かう機能と思考に向かう機能に拡張していく。行動分析学の射程の広さを読みとっていただけたらと思う。

第8章は、言語のもつはたらきがより複雑になり、高次になっていき、自分自身の行動や相手の行動に影響を与えるようになる過程を、ルール支配行動の成立と機能という点から検討している。また、微妙な修飾表現を行動分析学ではどのように扱うかを、スキナーの定義したオートクリティックの概念を用いて分析し、現代の語用論と行動分析学の関係について論じている。

第9章は、認知発達の中で、いわゆる「心の理論」に関する研究を取り上げ、行動分析学がそれらにどのようにアプローチするかを考察している。特に心の理論の有無を判別するとされる課題に含まれる刺激条件や言語理解と言語表出のありかたを抽出し、それらへの指導を行うことで、認知発達が促進されるかを検討している。

第3部は、行動分析学の言語臨床への応用について述べている。施設環境の中での利用者の生活の質を高めると自己決定を実現するための言語支援の方略(第10章)、発達臨床における言語

の早期療育(第11章)、学校教育の中での言語指導(第12章)、問題行動と言語機能との関連とその解決方略(第13章)、医療領域の中での脳障害者の言語療法における支援技法(第14章)などをまとめ、行動分析学の観点から、生涯発達の中での言語臨床のありかたとその技法と実践例を検討した。

第10章は、施設の物理的・行動的環境を利用者自身が変え、生活の質を高めていく上で、言語がいかなる役割を果たすかについて、いくつかの実践研究を中心に考察を加えている。特に、要求言語行動と選択行動に対する支援により、自己決定を実現することができることを論じている。

第11章は、これまで行動分析学の立場から大きな成果をあげてきた発達障害児の早期療育プログラムをまとめ、その言語指導のエッセンスをまとめ、体系化している。無発語の幼児に対して、模倣、物への操作、見本合わせから立ち上げて、音声言語につなげていく早期療育プログラムを具体的に示し、実践事例を提供している。

第12章は、言語に障害や遅滞をもつ子どもたちへの学校教育の中での指導・支援技法をまとめている。学校教育環境は言語指導の機会の宝庫である。その中で言語を用いる機会をどのように創出するか、整備するかという点から、これまで行われてきた実践事例研究を数多くまとめてある。また、行動分析学にもとづく指導技法も具体的に示されている。

第13章は、発達障害児者が示す問題行動の中には、物や注目の要求や回避などのコミュニケーション機能が含まれていることが多い。問題行動の形にとらわれずその機能を分析し、それがどのような強化刺激によって維持されているかを明らかにし、問題行動と置き換わる適切なコミュニケーションを教えることで問題を解決する技法と実践事例について述べてある。

第14章は、脳障害による記憶障害者の事例を通して、行動分析学が言語療法にどのように貢献できるかを論じている。治療技法として、日常生活の流れを課題分析し、繰り返し遂行させ(個人への指導)、記憶に置き換わる言語的な手がかり刺激を環境内に設置し、自発的な行動の実現をはかる(環境整備)。

本書を読むにあたって、行動分析学の基礎知識は必要ない。学生(学部生、大学院生)のみならず、学校の先生、施設の職員、言語聴覚士、臨床心理士などヒューマンサービスの実践現場の方にも十分理解できるよう事例をできるだけ多くあげ説明している。本全体には体系性があるが、どの章から読まれても、用語の定義など十分理解できるように書かれてある。これだけの多様で広大な領域が行動分析学という枠組みからアプローチできることを実感していただければ幸いである。

本書の刊行にあたり、著者の要求に次々と対応していただき、きめ細かい編集作業にあたっていただいたブレイン出版編集部の方々に感謝申し上げます。

## 学会情報: 常任理事会ヘッドライン

- 会員数(2001年9月30日現在) 550名(一般440名、夫婦5名、学生105名)。
- 2002年度大会の日程決まる: 第20回(2002年度)年次大会は、2002年8月22(木)、23(金)、24(土)の3日間、日本大学生物資源科学部で開催されます。場所は江ノ島、鎌倉、そして「サザン」のメロディが聞こえてきそうな茅ヶ崎に近い湘南の地です。来年は学会設立20周年ということで実行委員会では記念企画の「アジアの行動分析学者によるシンポジウム」を始め記念講演等盛り沢山の内容を検討中です。詳しくは年明けに配布される第1号通信ならびに大会ホームページをご覧ください。
- 学会賞設立に向け、準備を開始: 以前の会員のアンケートでも学会賞設立に関するポジティブな意見が強かったことから、企画委員会を中心に学会賞の原案を検討して来ましたが、10月の常任理事会において、その概要が決定いたしました。賞は「論文」と「実践」の2部門を対象とする予定で、今後、来年度夏の発足を目指して、賞の内容や選考方法の細目について検討を加え、規定化の準備をしていきます。
- 2001年度第1回公開講座、さわやかに開催される: 本年度本学会では公開講座を3回行います。その第1回目が、秋空の10月14日(日)に千葉県柏市で開催されました。「自閉症児(発達障害児)のコミュニケーションと学習」のテーマのもと、96名収容の会場にあふれるほどの参加者が集い、本学会員の講師と自閉症児の親の方々を中心に熱心な議論が繰り広げられ、地域密着、双方向的コミュニケーションという公開講座の趣旨が存分に活かされた講座となりました。第2回、第3回の講座もぜひご期待ください。

- 「ことばと行動-言語の基礎から臨床まで」(ブレーン出版)品切れに: 8月の第19回大会直前に出版された日本行動分析学会編の同書が、10月初旬に品切れになって購入できない状態が生じておりましたが、現在は増刷され入手できるようになっています。
- 機関紙バックナンバー破格のセール(期間 限定)を実施、お見逃しなく!: 常任理事会では、機関紙「行動分析学研究」バックナンバーの計画的で効率的な保管のあり方について検討しています。今回一つの具体策として、在庫の多い1巻から7巻までを中心に会員の皆様に廉価で販売することにいたしました。最近入会なさった会員の方々に昔の機関紙をお持ちでない方は、この機会にぜひバックナンバーをお揃えになったらいかがでしょうか。  
(情報提供:小野浩一理事長)

## 公開講座のお知らせ

### 『行動障害の理解と予防』

主催: 北九州発達障害ネット・日本行動分析学会・  
西南女学院大学保健福祉学部附属保健福祉学研究所  
後援: 北九州市手をつなぐ育成会・北九州市自閉症児者の未来を考える会

行動障害の克服は、障害のある人を支える人々にとって緊急な課題です。本領域における行動分析学の貢献は群を抜いていますが、近年特に、行動障害が起きてからの対処法から、QOLの向上を目指した予防的な対処法としての「先行子操作」が注目されています。

そこで、本公開講座では、「行動障害の先行子操作」に詳しい園山繁樹先生と野口幸弘先生を講師に迎え、その最先端の成果を家族、福祉・教育・医療関係者にワークショップ形式で公開し、家庭や地域における問題解決のための手がかりを学びます。

日時: 2002年3月21日(木) 10:00~15:00(9:30開場)  
会場: 西南女学院大学206教室(福岡県北九州市小倉北区井堀1-3-5)  
講師: 園山繁樹先生(西南女学院大学)・野口幸弘先生(大野城すばる園)  
定員: 100名/参加費: 1000円(当日、受付にてお支払い下さい)  
お申し込み: 3月15日までに下記を記入の上、郵便・FAX・E-mailでお願いします。  
〒803-0835 福岡県北九州市小倉北区井堀1-3-5 西南女学院大学 平澤研究室  
FAX:093-583-5035 E-mail: noriko-1@kb3.so-net.ne.jp  
諸変更: ホームページ(

<http://www12.u-page.so-net.ne.jp/kb3/noriko-1/>  
でお知らせします。

### 『発達障害児者の“ことば”にならない“ことば”を理解して支援する』 —問題行動を減らすための機能的コミュニケーション訓練—

主催: 徳島障害児教育ふお〜らむ・日本行動分析学会

発達障害児者が示す問題行動については、従来、その行動をとにかく減らすための対処法的なアプローチが取られてきました。これに対し、近年の行動分析学の知見からは、そもそもどうしてその問題行動が生じているのかを分析し、それに応じた支援をすることの有効性が、明らかになっています。問題行動は発達障害児者の“ことば”にならない“ことば”であり、家族や指導者がこうした問題行動の“意味”を理解し、同じ“意味”をもつ、より適切な行動を積極的に教えていこうとするポジティブな考え方です。

学校や施設、家庭等で発達障害児者の療育に携わる人々が、このような考え方にもとづき、問題行動の“意味”を理解するための機能分析をしたり、問題行動と同じ機能をもつコミュニケーション行動を代替行動として指導できるようになれば、発達障害児者やその家族にとっては、大きな力となるに違いありません。

しかしながら、残念なことに、このような考え方が広く一般に普及しているとは言えません。学校でも、子どもたちが成長して力が増すほど問題行動への対応も難しくなり、その場限りの対処に終わったり、気にはしているものの具体的な指導の方法がわからず、悩んだまま時間ばかりが過ぎていくという現状があります。そこで今回、徳島障害児教育ふお〜らむと日本行動分析学会の共催で、西南女学院大学の平澤紀子先生をお迎えし、行動分析学の視点から、“ことば”にならない“ことば”である問題行動の理解と、その支援法である「機能的コミュニケーション訓練」について

ご講演いただくことになりました。皆様の参加をお待ちしております。

日時：2001年12月15日(土)14:30～16:30

(14:00開場)

会場：徳島県郷土文化会館 4階大会議室  
〒770-0835 徳島市藍場町2-14(TEL 088-622-8121)

講師：平澤紀子先生(西南女学院大学講師)

プログラム：受付14:00～14:30／講演14:30～16:00／質疑・応答16:00～16:

30

定員：100名

参加費：1000円

(当日、受付にてお支払いください)

お申し込み・お問い合わせ：

参加ご希望の方は、12月5日(水)17:00までに、ファックスまたは電子メールでお申し込み下さい。  
お問い合わせは、徳島障害児教育ふお～らむ・担当：久保治子(徳島県立国府養護学校)までお願いいたします。尚、申込みが定員になり次第締め切らせていただきますので、ご了承下さい。

連絡先 FAX:088-642-7130／電子メール:kubo497@mb.infoeddy.ne.jp／電話番号:088-642-4055

\*お電話でのお問い合わせは15時～18時の間にお願いします。

○編集委員からのお詫び：編集作業の遅延のため、公開講座『発達障害児者の“ことば”にならない“ことば”を理解して支援する』の開催の期日までに会員の皆様にご案内することができませんでした。関係者の皆様並びに会員の皆様にお詫び申し上げます。(担当：渡部匡隆)

J-ABAニュース編集部

皆様からの記事を募集しています。研究室や施設・組織の紹介、用語についての意見、学会に対する提案や批判、求人・求職情報、イベントや企画の案内など、さまざまな内容に関する記事を期待しています。原稿はテキストファイルの形式で電子メールかフロッピー(DOS)により、以下の編集部までお送り下さい。掲載の可否は編集部で判断してお返事します。なお、掲載された記事の著作権は日本行動分析学会に属し、ホームページでの公開を原則にしています。メールアドレスなど、一般公開を望まない情報がある場合には、事前に編集部までご連絡下さい。

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 立命館大学文学部 望月昭

TEL & FAX:075-466-3189 E-mail: [mochi@Lt.ritsumei.ac.jp](mailto:mochi@Lt.ritsumei.ac.jp)